

第3日新丸船団による過去3年の鯨種別発見頭数

鯨種	年次		
	21 (S. 47)	22 (S. 48)	23 (S. 49)
F	331	168	421
Se*	941	797	747
Sp	828	1624	1652
B	29	16	223
H**	11	6	118
R***	3	2	1
M****	73	27	67

*Brを含む

ザトウ、*セミ、****ミンク

3) 第2図南丸船団

高橋長幹 (日本水産株式会社)

23次北鯨第2図南丸船団は5月28日操業を開始し、9月7日終了した。操業日数103日(ひげ・まっこう混獲92日、まっこう専漁11日)でありこの間の捕獲はF72 Sei 429 Br 115、Sp 601頭であった。当船団は主として東経漁場で操業したが、漁場が南偏シニタリ鯨の捕獲があった事が特色である。

主漁場としては

- (A) 37° N、168°E附近を中心とした Sei 漁場
 - (B) ミルウォーキーバンクからミドウェー沖合にかけての Br、Sp 漁場
 - (C) 48° N、170° E附近を中心とした F 及 Sei 漁場
- の3漁場であり西経での操業は大型の Sp を主体とした移動操業であった。

各漁場について簡単に述べる。

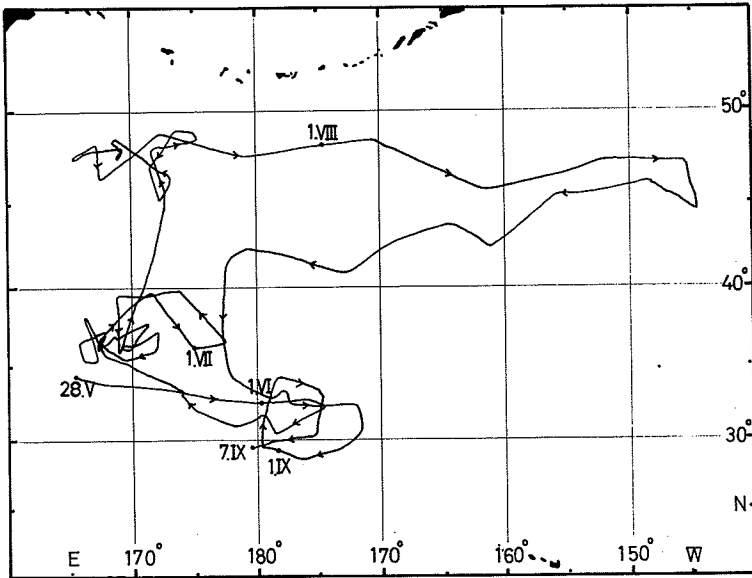
(A) 37° N、168° E付近の Sei 漁場

19~20℃台の暖水の突込みの周辺に形成された漁場で鯨は大型で動きは早かった。この北には12~15℃の冷水の張り出しがあり、水温傾度大きく、約1ヶ月間この傾向が続いた。鯨の餌量は小鯖が主で摂餌量は多かった。

20℃台以上の水帯には Sei 発見なく少数の Br が見られた程度であった。

	F	Sei	Br	Sp	B	H
発見	16	302	15	102	1	1
捕獲	7	234	7	10		

操業⊙5月28日から6月にかけての29日間



第23次北鯨第2回南丸船団概略航跡図

(B) ミルウォーキーバンク～ミッドウェー北側にかけてのBr及Sp漁場

6月初旬操業時は水温19～21℃でBrの分布は薄く餌料はウキエソであったが、8月下旬から9月上旬の操業時にはBrの発見多く水温も24～27℃に上昇しており、餌料はユーフアジアであった。この漁場での操業は気温も高く捕獲鯨の鮮度保持には特に留意する必要がある。

Spは小型であったが発見は多かった。

	F	Sei	Br	Sp	B
発見	1	7	234	600	2
捕獲		7	108	387	

操業⊙6月初旬及8月下旬から9月上旬にかけてのひげ18日, Sp 11日間

(C) 48°N、170°E中心のF及Sei漁場

この漁場ではB及F(小型が多い)の発見多く(分布範囲は狭い)良好な餌場となっていたようである。Seiは5～6頭の群をなしていたが、全般に薄く後続がなかった。

はじめ8～9℃台の水温であったが、7月12～13日の時化により7℃台に下り7月24日頃からようやく8～9℃に戻った。餌料はFはユーフアジア、Seiはカラヌスを摂餌していた。

この附近の漁場は今迄の Sei 主漁場であったが、昨年から Sei の発見が少くなっている感じを受け、8月頃どうなっているか調査する必要がある。

	F	Sei	Sp	B	H
発見	358	142	19	152	27
捕獲	62	110	19		

操業◎7月上旬から下旬にかけての23日間

(D) 西経を主とする移動操業

主に大型の Sp を捕獲しつつ 145° W 迄東進したが、アラスカ湾の発見は少く、天候の見通し悪く東進時の南寄りを反転西進した。42° N、162° W 附近で Sei の捕獲があったが、小型が多く、大型を求めて東経漁場に向け続航した。東経の北側は天候悪く北上をあきらめ、前記2の漁場に下り操業を終了した。

	F	Sei	Sp	B
発見	28	111	253	4
捕獲	3	78	185	

操業◎8月下旬から9月上旬にかけての22日間

参考 21北～23北第2回南丸操業船による発見

	F	Sei	Sp	B
第21次	522	1015	951	109
第22次	156	849	952	25
第23次	403	811	974	159

Br の分布については操業海域の問題もあり、160° W 以東の海域についてはほとんど未知数であるが、今後調査する必要がある。

2. 1974年夏期ベーリング海並びに北部北太平洋における鯨類の分布：北海道大学練習船おしよ丸航海における目視観察結果

河村章人（鯨類研究所）

1. 緒言

近年の北洋母船式捕鯨操業では主要捕獲鯨種をベーリング海には殆ど回遊をみないイワン鯨に求められ、ナガス鯨も併せ専ら北太平洋海域において捕獲されている。したがって、北洋といっても特にベーリング海方面における鯨類の分布状況については全般に知見が少い。また、最近は産業的に重要な大型鯨類のみならず、海洋環境・資源問題など自然保護の観点から小型や中型の歯鯨類（主として